

平成二十四年度「花のまわりみち」

川柳入選句

三浦 宏選

天地人・秀逸

「天位」

思いつきり咲いた桜に悔いはなし

越智 久男

(評)

来場者に精いっぱいのもてなしをしてくれた59種の桜の張り切りぶりをうまく代弁している。また、来年もよろしく、と申し添え、拍手を送って一週間のご苦勞をねぎらいたい。

「地位」

まっ先に今年の花に逢いに行く

井原 淑子

(評)

待ちに待った、造幣局広島支局の4月19日から「花のまわりみち」の開門。足早に、期待の今年の花、御衣黄の前にたどりついた作者の笑顔が見えてくる。

「人位」

病友と歩調合わせるまわりみち

西垣 武史

(評)

病院の許可をもらって、花のまわりみちを訪れた病の親友と二人。59種もの桜をじっくり観賞されて元氣をもらい、快方に向かわれますように。

「秀逸」(五句)

まわりみち僅か七日の晴れ舞台

石橋康徳

(評) 真剣に、天気予報と満開の予定日に取り組みながらの観桜。7日の期間では、桜ファンの予定が裏目にでることも多い。

開花宣言もう意地悪な風が待つ

楠山東石子

(評) 咲きはじめるのを待っていたかのような憎い風。対抗のしようもなく、静まるのを祈るしかあるまい。中には、開花前につぼみのまま地に返ることも。

御衣黄の色に驚いてるカメラ

久保田宏美

(評) 緑いろの桜の花を初めてご覧になる方の驚きが目に見えるようです。花のまわりみちでは、平成13年の第11回目に次いで、二度目の「今年の花」です。

楊貴妃にピントを合わせ妻おぼろ

岡田勝義

(評) 今日はいくまでさくらが主役。しかも、その名が楊貴妃。妻よ、今日のところは、少しピンボケになっても、我慢して許してくれ。

ポンポンと今にも弾む大手毬

沖本京子

(評) 花のまわりみちに来ればこそ、大手毬にもお目にかかれるというもの。小さい頃の子どもの毬突きを思い出される方もおられよう。

佳作

(十八句)

東にも届けこの地の桜風

香川紀香

もち上げる枝の腕力紅手毬

正木巧

楊貴妃につい誘われてまわりみち

松岡登代子

楊貴妃の名にあこがれて会いに来た

浅田悦子

御衣黄の緑の花の自己主張

勝山君江(きみこ)

御衣黄という想定外の花の色

正山史明

背のびして花卉数えて八重桜

日吉玲子

蜜蜂も桜離れて人に酔う

吉川美佐子

また来ようね絆深まるまわりみち

西畠悟

桜のよう君の笑顔は満開だ

兒玉ありさ

まわりみち出来る幸せありがとう

西畠由美

孫のほおほおずりしたい大手毬

田中康敬

いつのことブーケにしたい糸括

馬場なつき

八重桜わた菓子みたい食べたいな

田坂秀子

一年の無沙汰を詫びるまわりみち

熊谷純

さくらはねひらひらおちるたのしいね

おくはるな(7歳)

さくらみればこころおだやかまたくるね

さかはらこと

私の名さくらのもじがはいります

石原綺桜

選者吟

閉校の校舎別れの花ふぶき

三浦宏